

最高の「ほうび」

長野 彪児

ぼくには、百才の大きなおじいちゃんがいる。大じいちゃんは、ぼくと三つ年上のお兄ちゃんを目の中に入れてもいたくないというほどにかわいがってくれている。大じいちゃんの孫であるうちのお母さんも、相当大じいちゃんからは甘やかされてきたようだが、お兄ちゃんとおぼくが生まれてからは、ひ孫のぼくらの方が、お母さんよりさらに上をいく甘やかされっふりのようだ。何でそう思うのかというと、ぼくらが悪いことをしてお母さんにしかられていても、大じいちゃんはお母さんをしかるのだ。お母さんは、

「今までは、いつもおじいちゃんはお母さんの味方だったのに・・・。」
と、ぐちをこぼしている。

大じいちゃんは、会いに行く度におこづかいを用意してくれている。大体五百円玉一枚なのだが、おこづかいの名目によって、百円が上乘せされたり、時には五百円玉が二枚になったりする。小さい時から、決まって小さな小銭入れに首にかけられるようひもを結んで、

「ごほうびだ！」
とわたししてくれる。そのおかげで、ぼくの部屋は、同じ小銭入れが大量・・・。大じいちゃんは、忘れっぽくなっているから、百円ショップに買い物に行く度に同じようなおさいふを何個も買って、ぼく達が会いに行つた時にすぐわたせるように準備してくれているのだ。

ぼくは、将棋をやっている、大会でいい成績を出す事はもちろんごほうびの対象になるのだが、テストでいい点とったとか学級委員になったとか、リレーの選手に選ばれたとか、運動会で一生けん命がんばったとか、大きな事でも小さな事でも何だつて、

「おお、よくがんばったな。じゃあ、ごほうびだ！」

と言つて、おさいふを首にかけてくれる。そのおさいふはまるでメダルみたい。おこづかいがもらえる事はやっぱりうれしいけれど、首にかけられたおさいふが、がんばった事の証みたいで、その事がとってもうれしい。

ぼくは、将棋の大会でもらった賞状やたてを見るとほこらしい気持ちになるが、将棋がどんどん強くなって、大会で賞状をもらえるのが当たり前になつてくると、入賞できなかった大会では何とも残念な気持ちになり、すごくむなし。でも、ぼくの大じいちゃんは、そういう大会でも、予選を通過できたとか、格上の相手を倒せたとか、小さながんばりを見つけて、おさいふメダルを首にかけてくれる。負けたとしてもそこまでがんばった過程が大事なんだという事をそつと教えてくれる。

どんなに小さな事でも、ぼくががんばった事をみとめてくれる大きいおじいちゃん。家にある大量のおさいふを見る度に、ぼくにはこれだけががんばった事があるという自信につながる。大じいちゃん、ぼくをいつもほめてくれて、ありがとう。